

Oct.14,2008

森 一久様

先日は、資料「仮想・立花昭記念館」をお送り戴き、興味深く拝見いたしました。原子力事始に関するところでは、私の知らなかったことも多く、勉強になりました。特に、立花氏が「原子力談話会」から最初に電源開発の原子力室に参加した人であったとは存じませんでした。これを知っていれば彼にもっと敬意を払って接するべきではなかったのかと思います。私は一応原子力談話会の会員ではありましたが、熱心な会員であったとは申せません。昭和35年に原研に就職してから高速炉の勉強を始めたのでした。

私が原研へ行く以前には、立花氏が大阪市大の南部陽一郎さんの所に在籍していた頃に大阪で会った記憶があります。その後に電源開発に大塚君を訪ねた折に紹介されて立花氏とは顔知りの間柄でしたが、昭和39年頃まではあまり話合うこともありませんでした。

昭和39年の2月に始まった高速炉懇談会では高速炉開発の考え方を役所に言われて話をしにいきました。原研から出ていた杉本朝雄理事に、君は心臓が強いと叱られた覚えがあります。この年の6月に原研の役員の更迭がありました。10月になると原子力委員会は新たに動力炉開発懇談会を発足させました。原研は丹羽理事長がメンバーで参加されました。

この懇談会で、ある程度議論が進んだ昭和40年の初めに高速炉ワーキンググループが始まることになりました。私は事務局の手伝いをさせられていました。役所の動力炉開発課の倉本氏、内田氏らが若い元気な人にも加わって貰いたいというので、数人を推薦しました。その中に立花氏も入れてあったのですが、当初、原電から立花は駄目だと言う返事でした。一本松さん、嵯峨根さんには昭和38年の12月にデトロイトの電力会社でフェルミ炉の臨界のお祝いの会で3日ばかり一緒だった関係で何でも話が出来る状態でした。それで立花氏を委員として出してくれるよう、原電の副社長室へ頼みにいきました。彼を左翼思想の持ち主として警戒しているとのことでしたが、こっちも大分粘りました。結局、ワーキンググループで配布される一切の資料は原電の上司に渡すと言う条件で出してくれることになったのでした。

ワーキンググループでは、自主開発路線をとるべきだと立花氏は主張されたのでした。電力業界の代表はデトロイトエジソン社のエンリコ・フェルミ高速炉への技術者の派遣制度の活用によって、西独のように実験炉段階をスキップして原型炉から開発を進めるべきと主張していたのです。当のフェルミ炉は、その後、間もなくして燃料溶融事故を起こし、廃炉となりました。

別添で、伏見先生との付き合いがあったなら書くようにとのことで、或る所（ヤフー上 viva-ars; 学術文化同好会）へ一文を認めたものがありますので、同封します。

原研での高速炉開発の立ち上げのことなどをという話で電中研でしたか鈴木さんがこの藤井寺の家まで来て下さいました。その後、何か病気だと聞きましたが、どうされていますか。資料は、一応まとめてあります。ついでに原研で高温ガス炉開発の立ち上げを村田浩さんにやらされたときの資料も整理しました。

末筆ながら、喜多尾 憲助様にも宜しくご伝言の程をお願いします。

583-0036 藤井寺市恵美坂2-2-10

電話&FAX; 072-995-3328

E-Mail:dpexe801@kawachi.zaq.ne.jp

能澤正雄

2003年の夏に東京會館で行われた伏見会で先生にお目にかかったのが最後になった。その年の秋に私は水戸市の家を引き払い大阪府の藤井寺市へ引っ越した。かねてから頸椎のところでの神経圧迫症があり、加齢による症状の進行で歩行が困難となり、43年間続けていた毎月の水戸と大阪の往復が重荷となってきたからである。

1948年4月阪大の物理の学生になって直ぐ、大塚益比古君と川口正昭君と親しく話すようになった。その夏に、川口君の誘いで私も大塚君と共に阪神電鉄の香櫨園駅から海岸の方へ行った所に住んで居られた伏見先生を訪問したのだった。その折りに、小学校1年生だった長男の譲君が居間でお茶をよばれていた我々のところへ、「取ってきたよ」と泥鰌を差し出されたのを覚えている。

1950年、私が学部3年生になって卒業研究のために入れてもらったのは菊池正士先生の研究室だった。だが間もなく、菊池先生はハンス・ベーテの招きでコーネル大学へ出掛けられた。1951年度予算で、米軍に大阪湾に投げ込まれてしまったサイクロトロン¹の再建資金が認められた。阪大には電源一式など残されていたものが多かったからだと言われた。最年長の当時まだ助教授だった若槻先生を中心に計画を進めることになったが、菊池先生が帰国されるまで伏見先生に代表をお願いすることになった。

その頃、伏見先生から昔出した「不思議の国のトムキンス」を持ってないかと聞かれ、家にあったのを差し上げると大変喜ばれた。何か、版權問題を解決して、改訳を出されることだった。

1959年の秋に広島市で物理学会の分科会があった際、東工大の武田栄一教授が私を呼び止められ、阪大を辞めて原研へ来ないかと要請された。当時、武田先生は原研で原子炉開発部門の非常勤の研究室長をやっておられたが、そこは若い人ばかりなので研究経験のある人を入れたいと考えられたのだった。数人の採用枠がある、君が適任ではないかとの話を聞いたのでこの話をする次第だとのこと。広島から大阪へ帰ると今度は若槻哲雄教授から原研の核物理研究室への就職を薦められた。私は武田先生から勧誘を受けていたので返事を保留していた。大阪で既に原研の理事長を引き受けられていた菊池正士先生に会う機会があり、挨拶したら原研に来るなら原子炉が本命だからそちらを選ぶようにと言われた。後に、原研の核物理研究室長をされていた百田光雄先生から能澤を誘ってみたらと武田先生に言われたのは、伏見先生だと教えられた。武田先生は戦前、阪大理学部におられたので伏見先生とも親しかったのである。1960年4月、私は東海村へ着任した。

1969年頃、原研で働いていた私の所へ伏見先生から連絡があり、頼み事があるとのことで、東京で出張の折にお会いすることにした。それは、共立出版社から刊行される予定の物理実験講座の原子炉・核融合編を引き受けたのだが、原子炉の部分を手助けしてくれないかと言うものだった。私に執筆者の人选を任せて下さるならやりましょうと答え、原研の実績のある人に各部門の執筆を依頼したのだった。私は序論として、実験に必要な基本的な原子炉物理を伏見先生との共同で書いた。核融合・プラズマ編は原稿がなかなか集まらないので、結局のところ原子炉編が独立で出ることになった。核融合についても伏見先生の指示で私がオークリッジ国立研究所でした仕事を寄稿した。当時は学園紛争の余波でこの講座の原稿がなかなか上がってこないと編集担当の佐藤さんがこぼしていた。

その後どういってお気持ちだったのか未だに判らないのだが、公明党の推薦で参議院議員になられた。議員会館にお訪ねしたり、神宮前の近くの議員宿舎にご一緒して泊めて頂いたりした。原子力船「むつ」の失敗の原因を明らかにしたいので、手伝うようにと言われていたが、結局のところお役に立てずじまいだった。

私が原子力開発の分野で多少の仕事が残せたのは伏見先生のお導きによるものである。

2008年8月6日記す

追記；原子炉への転業の背景

私は、家業が中小企業の鉄工所で、大阪市立都島工業学校の機械科卒業です。物づくりには抵抗なく参加できます。工業学校の次は大阪臨時教員養成所に行きました。昭和20年4月でした。戦争が終わるまでは元の動員先にゆけということでしたが兵役に就いていました。昭和20年には、満18歳になれば召集して兵役につかせることが出来るようになったのです。私は5月に満18歳になり、赤紙を6月に貰い、独立工兵隊に入れられて和歌山県は紀ノ川の川口付近に配置されました。敵戦車が上陸して来たときに、蛸壺に潜んでいて、敵のキャタピラーの下へダイナマイトを差し込む訓練をしていました。

大阪臨時教員養成所は、戦時の中学校の理科すなわち、数学、物理、化学の教員不足を補うために出来たものです。場所は阪大理学部に併設され、先生は理学部の大学院学生から教授の方までおられました。私たちは、4期生で戦争が終わり、最後のクラスでした。物理の先生は若槻助教授、実験物理の講義は澤田昌雄教授、数学演習は内山龍雄助教授、化学は誰とかで、皆さん個性的な講義をなさいました。理学部の外からこられる先生もおられました。英語の佐谷先生は浪速高等学校の先生、哲学の平沢先生は大学事務局の学生部長で新制大学発足と同時に大阪外語大学の学長になられた方といった具合です。幸い大学の受験資格は頂けることが分かっていたので、昭和23年には阪大物理の学生になりました。

以上（2008年10月14日記）